

リスク社会論の再解釈

——バイオソーシャル・アプローチによる1つの試み——

日本女子大学 三原武司

1 目的

本報告は、リスク社会論をバイオソーシャル・アプローチによって再解釈することを目的とする。バイオソーシャル・アプローチとは、生物学から伝統的な社会学の知見までを連続的にとらえ統合することによってヒトの社会性を理解しようとする方法や取り組みのことで、バイオシオロジーなどの呼称とともに近年注目をあつめている。背景には、生命科学の社会的転回 (social turn) をうけた社会学と生物学の関係の変化がある。この潮流のなかで注目されているのが、エピジェネティクスや DOHaD である。本報告では、これらの知見とリスク社会論を架橋する視点を構築していく。

2 方法

まず、ウルリッヒ・ベックの『危険社会』にそくして、近代から再帰的近代ないしリスク社会への転換にともなっておきた (1) 環境化学物質がもたらす問題と、(2) 個人化の問題の 2 つの論点をとりあげる。つぎに、その論点にエピジェネティクスや DOHaD の研究動向を重ね、環境化学物質と個人化や社会的排除のストレスがもたらすエピジェネティック変異について言及する。

3 結果

リスク社会論とエピジェネティクスを架橋した結果、環境化学物質と個人化という 2 つの論点は、ともにエピジェネティックなメカニズムが伏在する点で共通していることがわかった。本報告で言及する発達障害などのエピジェネティック変異は、環境問題や貧困問題にかかわる。子の障害が妊婦や母親の自己責任に帰せられるような誤謬を防ぐためにも、リスク社会論の枠組みは有用である。

4 結論

バイオソーシャル・アプローチ以前は、生物学と社会学の知見が分断されていた。『危険社会』の 2 つの論点は、その分断を慎重に反映していたといえる。他方でベックは、ヒト自身が自然の一部であると悟ることで「肉体と精神、自然と人間という二元論」が消失するか、あるいは止揚されるとも論じている。この視点は、バイオソーシャル・アプローチを先取りしている。リスク社会論は、エピジェネティクスにたいする包括的な説明の枠組みを提供する理論体系となりうるだろう。

文献

Meloni, Maurizio, Simon Williams and Paul Martin eds., 2016, *Biosocial Matters: Rethinking Sociology-Biology Relations in the Twenty-First Century*, *The Sociological Review Monographs* 64(1).

三原武司, 2017, 「リスク社会論の再解釈——バイオソーシャル・アプローチによる1つの試み」『年報社会学論集』30.

Walsh, Anthony, 2014, *Biosociology: Bridging the Biology-Sociology Divide*. New Brunswick, NJ: Transaction.